

Japanese Working Class Artist ~ RYO KANZYU



短い物語P&D

ベンチの夜



ORIGINAL
SINGLE

「ベンチの夜」

馴染みのBARからの帰り道。

高揚していたせいか、男はしばらく歩きたくなった。

少しだけ遠回りの道を選び、客を待つ車が連なる通りへ出る。

どちらかといえば速い足取りで、向かったのは立体パーキングの一階にあるコンビニ。

すれ違う連中を警戒しながら、歩くルートを計算する。

明るい通りでも、男は決して油断することはなかった。

客引きを巧みに回避しながら、低空飛行で歓楽街を抜けた。

途中、知り合いの車かもしれないと思って路駐の車を覗いたりもした。

男は酔っていたけれど、彼曰くほんの少しだけ。

まっすぐ歩こうとする意識はあった。

それでも夜勤明けからずっと眠っていないせいで蛇行した。

眠気を覚ますため、力を込めた瞬きを繰り返す。

男の免震機能は疑わしい状態。

時々ふらつきながらも、なんとか目的地の近くにあるベンチにたどり着いた。

ゆっくりと石の座席に腰を下ろす。

前屈みのまま膝に手をつけて、顔を右へ向ける。

なんとなく店内が騒がしく見えた。

明かりにつられて来たけれど、夏の虫になりたくない男は、少し様子を伺うことにした。

背もたれで涼を取りながら、歩道に視線を落とした。

すると、真っ先に正面のゴミが景色を広げた。

道の真ん中に大きめのカップ。

少量のスープと麺が見えている。

捨てられた割り箸は、たぶん無料。

街路樹の根元には、夜に映える白いレジ袋。

役割別に用意されたゴミ箱の前に並んだコーヒー飲料の空き缶。

時代遅れのポイ捨てされた吸い殻。

綺麗なままのフライヤー。

周囲を見渡した男は、無料でワーストな夜景を見た。

体内で不快な成分が急増し、体の重みが増した感じがした。

ここのベンチだけ重力が違うようだ。

男は片付けるために立ち上がる気はおきなかった。

そして、いつのまにか瞼を閉じていた。



落ちるつもりはなかったが、睡魔は最後の一手をb。

眠ったらまずいと思い、力いっぱい両腕を広げて伸びをした。

一瞬だけ音が遮断された後、何か聞こえてきた。

声はベンチの後ろの方からだ。

けれど、後ろは車道のはず。

それでも何人かいる気配がある。

僕は目を閉じたまま聴き取ることに集中した。

「水がおいしくない。降ってくるのも味はイマイチ」

「土も変な匂いがするよ」

「風は見えるくらい汚れてきた」

男には聴こえる。

はっきりと。

「いまだに愚かな争いを繰り返しているとはね。奴らは学ばないから年輪に何も記憶されないよ
うだ」

「さっき通り過ぎた人は幸せそうに見えるね。かなり酔っていたようだけど」

男は幸せそうに酔う知人の姿を思い出した。

それから、いくつかの言葉が気になった。

「この辺りもここまでか」

「そろそろ潮時かな」

路肩の段差に座りこんで雑談しているのだろうか。

男には確かめたいという気持ちはあったが、躊躇した。

なぜか汗が余計に噴き出してシャツに染みる。

寝たふりをする必要はなかったけれど、自然とそうになっていた。

「もうこの星は見つかっているんだってさ」

「そのことは知らないほうが幸せだよ」

「でも、わたしはここを離れたくないなあ」

後ろの連中は、いったい何者なのだろう。

男は不安を吹き込んだような疑問を膨らませながら、これからどうしようか迷った。

迷い続けた結果、睡魔に攻め込まれてしまった。

無防備のまま、男は夜の湿気に沈んだ。

目覚ましの代わりはゴミをつつくカラスたちだった。

だらしなくもたれていた体を起こすと、右の頬に何かが触れた。

びっくりして払い除けたものは、街路樹の垂れ下がった細い枝。

夏を脱色したような葉が一枚舞う。

そして、左側に人の姿を捉えた。

いや、違った。

それは少女の姿をしたベンチのオブジェだった。

僕は昨夜のことを思い出しながら姿勢を正した。

それから思い出したようにベンチの後ろを覗いた。

誰もいない。

何も無い。

吸い殻やゴミが残っていることはなく、何人かが集まっていたような形跡はなかった。

僕は座り直し、考え始めた。

それは二度寝をさせない妄想。

街はノイズばかりだと思っていた。

人の声も、車の騒音も。

そう思っていたけれど、昨夜はいつもと違っていた。

その気になれば聞こえてくるのは人の声ばかりじゃない。

聞き逃していた声があっても不思議じゃない。

人目を気にしても、人を見ているのは人だけじゃない。

監視カメラでさえ、意志を持っている。

男は所持品を確かめ、独占していたベンチから腰を上げた。

さて、とりあえずはコンビニへ行こう。

男には日課みたいなものだから。 ～終わり